

戦前の内モンゴルにおける知識人とチンギス・ハーン信仰について ——Köke tuy (『青旗』) 誌の記事の分析を中心に——

昭和女子大学大学院生活機構研究科

ハス

はじめに

20 世紀初期、世界の「民族自決」運動の流れの中で現在のモンゴル国は 1911 年に清朝から独立した。その後、中華民国領となった内モンゴルは、中華民国、日本、ソ連との関係における複雑な国際情勢の中で民族の自立を守ろうと試みてきた。本発表における「戦前の内モンゴル」とは基本的に内モンゴルが日本の支配下にあった 1930－40 年代を指す。この時期に内モンゴルのモンゴル人たちは民族復興運動を行い、民族の啓蒙と解放をもっとも強く求めていた。その重要な一環として、行政による近代的な教育の促進や知識人の政治的、文化的活動などが注目される。

モンゴル人アイデンティティにおけるイデオロギー的側面は時代により異なるものであった。しかし、唯一チンギス・ハーン信仰は変わらないものであった。チンギス・ハーン信仰は時代により、モンゴル社会にさまざまな政治的な意味をもっていた。こういう意味で、1930－40 年代に活躍していた内モンゴルの知識人たちとチンギス・ハーン信仰の関連性はどうかであったのか、本研究はそれについて考察を行うものである。

1. 戦前の内モンゴルの状況

筆者が研究対象とする 1930－40 年代の内モンゴルでは、政治、社会、経済、文化の諸領域にわたって日本の影響が大きかった。1932 年に日本が「満州国」をつくったことにより内モンゴルの東部とフルンボイルは満州国の一部となった。その後日本の勢力は内モンゴル西部へ拡大し、ジンギス・ハーンの第三十代の子孫である徳王（テムチュグドンロブ王）を主席とする「蒙疆政権」がつくられた。この時期は、内モンゴル西部においては日本の勢力の影響以外に中国国民党の政治的影響も存在していた。また、チベット仏教は清朝時代と変わらず、モンゴル社会に強い影響をもっていた。チベット仏教の普及は、清朝の対モンゴル人政策の一つであり、モンゴル人の勢力拡大をおさえ、チンギス・ハーン時代の歴史を忘却させるような役割を果たしていた。そのために、1930 年代までは一般のモンゴル人にとってはチンギス・ハーンへの崇拜よりもチベット仏教を信仰するのが普通であった。一般の牧畜民にとってこれは現在も見られる現象である。

1930 時代に内モンゴルのモンゴル人の生存に関わる遊牧地帯においては人口減少の傾向があった¹。その最も重要な要因として考えられていたのがチベット仏教の影響であった。

¹ 善隣協会調査部 編『蒙古大観』（1938）.298 頁の表を参照にした。

一世帯に男の子を一人残し、それ以外の男子児童をチベット仏教寺院に入れてラマ僧にしていたからだ。同時に、モンゴルではラマ僧の妻帯が禁じられていたからだ。このような現象は遊牧地帯にはより普遍的だった。こういう意味で、1930年代までの内モンゴルで一般人はチンギス・ハーン崇拝とはあまり縁がなかったと考えられる。チベット仏教の信仰行事はモンゴル人にとっては事情生活の一部なので、チベット仏教はモンゴル文化の重要な一環でもある。満洲国建国後、モンゴル人は近代的な教育及びモンゴル文化の促進を進めてきた。1940年代になると、モンゴル人を対象とする近代的教育の展開に目覚ましい成果が見られるようになり、それに伴う知識人の育成が注目されるようになっていた。

2. 近代における内モンゴの知識人の活動

近代における内モンゴの知識人の活動については三つの時期に分けることができる。第一期は、内モンゴルで近代化を進めたことで知られるグンセンノロブ王が20世紀初頭に育成した知識人たちの活動である。第二期は、1920年代に中国領内で近代的な教育を受けたモンゴル知識人たちの活動である。1920年代にモンゴル人が教育を受けられた近代的な教育機関としては、北平と南京にあった蒙藏学校、奉天蒙旗師範学校、中央政治学校、黄埔軍官学校、中央軍官学校、日本の陸軍士官学校などが挙げられる。第三期は、1930-40年代に満洲国など日本の支配地、あるいは日本で教育を受け、そこで育成された知識人たちの活動である。この第三期には、モンゴル民族復興運動が最盛期を迎えるようになっていた。実際、それが当時の内モンゴルの知識人たちの活動と密接な関係があった。それに1940年前後は内モンゴルで知識人階層が形成されはじめた時期でもであったと考えられる。それにあたり、知識人の活動及び知識人階層の形成にもっとも重要な要素となったのがチンギス・ハーン崇拝及びモンゴル語刊行物の刊行が盛期を迎えたことであった。

現在の内モンゴルのモンゴル人アイデンティティの形成に関しては、13世紀のチンギス・ハーンに対する崇拝は各歴史時代とも同じであった。しかし、1930—40年代の内モンゴルにおけるチンギス・ハーン崇拝は、当時の内モンゴルのモンゴル人にとってはどういう意味をもっていたのであろうか。

20世紀10年代以来、中国軍閥の略奪や無政府状態により、存亡の危機に直面していた内モンゴルでは1930年代から民族の復興を目指す政治的動きが目立ちはじめた。このような時期は民族振興のナショナリズムが形成しやすく、モンゴル人にとってはチンギス・ハーン信仰がモンゴルの運命を変える精神力になりがちであった。要するに、当時の内モンゴルの知識人たちは、モンゴルの振興のためにはチンギス・ハーンがつくった歴史の勢いに精神的な力を求めなければならないと考え、チンギス・ハーン崇拝につながる活動をしていたと考えられる。それに、この時期のチンギス・ハーン崇拝の近代的起源が日本との協働的なナショナリズムであったともみられている。

内モンゴルにおいて1930—40年代は、モンゴル語刊行物が発達期を迎えた時代でもあつ

た。これがモンゴル人知識人たちと密接な関係があり、彼らの活動の重要な一環であった。いうまでもなく、モンゴル語の刊行物は知識人たちにとっては自分たちの考えを伝える重要な手段の一つであった。こういう意味で、当時満洲国内で発行されていたモンゴル語刊行物の中で、もっとも広く読まれていた *Köke tuy* 『青旗』(誌(以下は『青旗』とする)の記事を中心に、当時の内モンゴルにおけるモンゴル人知識人たちの活動を考察してみることが重要である。

3. 知識人たちの活動の一環となる『青旗』誌

『青旗』誌における知識人たちの執筆活動について考察する前に、『青旗』誌についてふれておきたい。1941 年に、満洲国の首都であった新京に青旗報社が設立され、モンゴル語の新聞 “*köke tuy*” (青旗) が創刊された。『青旗』誌の創刊号は 1941 年 1 月 6 日に発行され、第 1～88 (1941－1942) は全 8 ページ、サイズは A 2 版、第 75 号まで週刊であったが、それ以降は旬刊になった²。また、第 89～178 号 (1943－1945) は、全 4 ページに縮小されていた。『青旗』の発行者は初め窪野隆男であったが、竹内正が受け継ぎ、主編はターチン、マニジャブ、ビシレルト、ハルバルス、モーノホイ、ダンザン、リンチン、ドガルジャブであった。その内容は、当時の国際情勢と満洲国内の情勢、満洲国内外のモンゴル情勢などの内容の欄が掲載されていた。これらの内容以外、「健康と家庭」欄、「読者の投稿」欄、「日本語会話」欄、「児童」欄 (子供の青旗)、連載小説などが掲載されていた³。『青旗』の読者に関しては広川 (2007) が「投稿者の多くは、満洲国の学生や教師、日本に留学中のモンゴル人学生であることから、これらの層が読者であったことが伺われる」と述べている。

現在、『青旗』誌はすでに学界に知られている資料であり、その 1-178 号の内、16 号・41 号・137 号 (1-2 頁)・138 号・139 号 (2. 4 頁)・157 号が欠号している。

日本の対内モンゴル政策及びモンゴル文学などの視点から様々な研究が行われつつある。主として、広川佐保の「1940 年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」(1997) と「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」(2007) 及び内モンゴル大学のゲレルト教授が文学の視点から収録し、論じた “*Soyu-yin noyuy-a 1931-1945 on-u qoyurunduki mongyul uran jokiyal-un songyuburi*” (谷間の青草 —1931—1945 年代におけるモンゴル文学—) (1998) がある。これは『青旗』に掲載されていた文学作品についての研究である。しかし、今までの『青旗』誌の研究全体においてチンギス・ハーンをテーマにした記事を政治的な視点から分析した研究はまだ見られない。

² 広川佐保 (2007) 「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」、104－126 頁。

³ 同上。

4. 『青旗』誌への投稿者

本発表では「知識人」については詳しい定義を行うに至っていないが、『青旗』誌への投稿者はいずれも当時の「知識人」として考えられている。投稿者は、上に見たように、「満洲国内の教師・学生や日本に留学中のモンゴル人学生」などの若者を中心としたモンゴル人であった。彼らはモンゴル諸族の自決及びモンゴル人の統合を目標にした活動していた。その活動においては、徳王の存在や影響力が大きかった。当時、徳王は自らの王公としての身分を利用し、内モンゴルにおける盟旗王公の政治力を結集する一方、モンゴル青年知識人たちを自分の周りに集め、彼らの変革思想を吸収しながら分断された内モンゴルの行政単位としての盟旗を統一し、内モンゴルの政治的統一を目指していた。こうした徳王の影響を受け、モンゴル諸族を復興させることに積極的に活動していた青年知識人が多かった。

4.1 『青旗』誌への投稿に見られる知識人の活動

モンゴル民族の歴史において各時代のモンゴル人アイデンティティにチンギス・ハーンの依存は否定できない。それが戦前の内モンゴルの社会にもさまざまな形で反映されていた。チンギス・ハーン信仰が当時の内モンゴル東部の知識人たちによる『青旗』誌への投稿内容にどのように反映されていたのか、それについて以下のように五つにまとめ、分析を行いたい。

(1) 『青旗』におけるチンギス・ハーンに対する呼び方は以下のように7つであった。

- ② boyda Činggis (聖なるチンギス) 5号 1941.4.14
- ② abu Činggis (父なるチンギス) 5号 1941.4.14
- ③ bidan-u ebüge Činggis qayan (われわれの先祖なるチンギス・ハーン) 7号 1941.4.28
- ③ tayidsu Činggis qayan (太祖のチンギス・ハーン) 8号 1941.5.10
- ⑤ ačitu qayan (恩恵のあるハーン) 25号 1941.9.6
- ⑥ tümen nasutu boyda (万歳の聖者) 42号 1942.1.3
- ⑦ ebüge Činggis (先祖なるのチンギス) 47号 1942.2.7

(2) チンギス・ハーンをテーマに、モンゴル諸族はどのような民族であったかについて述べた論述の中からその一部を掲載する。

- ① 「世界にいるモンゴル人の分布を紹介しよう」 28号 1941.9.27

- ② 「世界の歴史に対する認識とモンゴル諸族」 82号 1941.1.3
- ③ 「われわれのモンゴル人若者たちよ、努力せよ」 12号 1941.6.7
- ④ 「モンゴル人若者たちの義務」 28号 1941.9.27
- ⑤ 「モンゴルの後裔であるわれわれが前へ進むには」 50号 1942.3.1
- ⑥ 「モンゴル民族の復興と努力する文学」 10号 1941.5.24
- ⑦ 「モンゴルの文学を発展させるための論説」 15号 1941.6.28
- ⑧ 「モンゴル民族が復興するには」 20号 1941.8.2
- ⑨ 「モンゴル諸族としてのわれわれ」 22号 1941. 8.16
- ⑩ 「文学がある民族の女性と文学を書くモンゴル女性」 25号 1941.9.6
- ⑪ 「フフ（青）・モンゴルを再復興させよう」 同上
- ⑫ 「先祖の偉業を思い浮かべよう！」 同上
- ⑬ 「チンギス・ハーン時代を回顧するだけでいいのか」 26号 1941.9.13
- ⑭ 「モンゴル人若者たちの前へ進む歌」 同上
- ⑮ 「モンゴル民族の歴史を回顧する」 33号 1941.11.1
- ⑯ 「文学を忘れようであれば、衰退する」 同上
- ⑰ 「モンゴルの若者たちの反省」 34号 1941. 11.8
- ⑱ 「モンゴルの歴史とモンゴル語を学習する目的」 79号 1942.10.3
- ⑲ 「われわれの反省」 85号 1942.12.3
- ⑳ 「われわれモンゴルの歴史と文字との関係」 99号 1943.4.23

ここに観察されるのは、チンギス・ハーン及びチンギス・ハーン時代の歴史への敬いとそれに対する自分たちの主張を表現した当時の青年知識人たちの考え方であった。それには、われわれの「モンゴル諸族とは何か」、「モンゴル人若者たちの義務とは何か」、「モンゴル諸民族を救うための文学の必要性」などの論述があり、チンギス・ハーン時代の歴史をモンゴル人同士で共鳴できるよう、努力し、活動を行っていたことが克明に映されている。また、モンゴル人の歴史を顧みるという活動の一つの例としてはモンゴルの著名な歴史小説であるインジャンナシの *Manduγsan törü-yin köke sudur*（興隆し家の青き年代記）を23号から連載していた。

(3) チンギス・ハーンを語り合う詩や歌の掲載

『青旗』誌には、チンギス・ハーンをめぐる詩や歌、教訓などが次の通り、多く掲載されていた。

- ① 「チンギス・ハーンについての詩」 10号 1941. 5.24
- ② 「先祖チンギス・ハーンの教訓」 12号 1941.6.7
- ③ 「フフ・モンゴルの若者われわれの考え」 37号 1941.11.29
- ④ 「モンゴルの若者の歌」 40号 1941.12.20

- ⑤ 「チンギス・ハーンの知恵の鍵」 48号 1942.2.14
- ⑥ 「勇気ある若者の歌」 111号 1943.9.23
- ⑦ 「チンギス・ハーンの遺言」 84号 1942.11.23
- ⑧ 「聖なるチンギス・ハーンの揺りかご」 同上
- ⑨ 「モンゴルを復興させる詩」 78号 1942. 9.23
- ⑩ 「古いフフ・モンゴルの歌」 83号 1942.11.3

このように、『青旗』誌にチンギス・ハーンへの敬いを表した詩及び歌などが数多く掲載されていたことは、当時の若者の間に、チンギス・ハーン信仰が盛んになっていたことを意味する現象であった。上に見述したように、『青旗』誌には「児童」欄（子供の青旗）もあったために、子どもたちにもチンギス・ハーンについて物語から理解させようとしていたと考えられる。

（４）チベット仏教に関する論説

1930年代、内モンゴルではチベット仏教の影響が強かった。本来、チベット仏教はモンゴル人にとっては文化の重要な一環であり、生活習慣にもチベット仏教によるしきたりが多かった。しかし、1930-40年代は、モンゴル人口の減少によるモンゴル民族の生存に関わる事態が発生していた。その主な要因はチベット仏教の影響によると考えられていた。それまでの一般のモンゴル人の間ではチンギス・ハーン時代の歴史があまり知られず、それがチベット仏教への信仰が強まった原因であると考えられていた。

このような状況を憂慮していた当時の知識人たちはチベット仏教における改革政策の実施を望んでいた。そのために、知識人たちはモンゴル人がチベット仏教の影響から脱却できるような民衆に対して啓蒙活動を行っていた。いわゆるこの時代には、モンゴル人にとってはチベット仏教への信仰より、モンゴル民族が存亡の危機に直面していた時期であった。そのために、モンゴル人というのがどういう民族であるべきかを模索していたのだろう。「われわれ」はどんな民族であったかを自己意識させるために、モンゴルの歴史的な人物チンギス・ハーンを取り上げ、再び民族意識を高揚させようとしたと考えられる。満州国では、チベット仏教への改革政策などを行っていた。また、知識人の民族自己認識の重要性の強調などを通し、チベット仏教のお坊さん（ラマ）は自らからの反省や政府への援助活動などの事例がみられるようになっていた。『青旗』に掲載されていた論述の中からその一部を掲載する。

① お坊さんたちの教育との触れ合いの例

ブフヘシグ(Bokekesig)(1902-1941)は内モンゴルの近代知識人の一人である。彼は1926年に「蒙文学会」を創立していた。同会は主にモンゴル語の研究及びモンゴル語の刊行物などを発行していた。お坊さんたちも同会を訪問していたのが「お坊さんたちの新教育を受けている様子」というタイトルで写真ともに掲載されていた（『青旗』3号 1941.4.3）。

こういうことからみれば、お坊さんたちも自ら近代的な教育を受け入れていたことが分かる。

- ② 「お坊さんの結婚は認められたのがモンゴル復興のシンボル」 26号 1941. 9.13
- ③ 「文学はどれ程重要であったと理解するようになったお坊さんナンディンベの話」 48号 1942. 2.14
- ④ 「バーリン右旗の各寺にお坊さんの学校を創立していた」 81号 1942.10.23
- ⑤ 「チベット仏教を信仰した感想」 128号 1944.2.13
- ⑥ 「ボグト戦争に積極的に援助していたお坊さんの話し」 141号 1943.6.23
- ⑦ 「現在の年配のお坊さんと若者」 同上
- ⑧ 「宗教とモンゴル諸民族」 7号 1941.4.28

以上は『青旗』に掲載されていたチベット仏教に関する論述である。お坊さんの自分自身の論説及び知識人の論説であった。「宗教とモンゴル諸民族」という論説は日本留学中のラシチュンネー (*rašiČungnai*) の投稿したものであった。同論説には、モンゴルの衰退・人口減少の原因がチベット仏教の影響であると書かれていた。

(5) モンゴル語の刊行物の販売

当時のモンゴル社会においては、チンギス・ハーンに関する歴史文化の本を出版し、それを販売していたことがきわめて注目される。

5. 『青旗』誌についての評価

『青旗』誌は当時の社会にどのように評価されていたかに関しては、同誌に掲載されていた記事から考察してみる。

- ① 「青旗を祝うチンギス・ハーンについて歌」 5号 1941. 4.14
- ② 「フフ・モンゴルを復興させる青旗」 12号 1941.6.7
- ③ 「青旗を提唱した論文」 31号 1941. 10.18
- ④ 「青旗を読む価値」 48号 1942. 2.14
- ⑤ 「青旗のために努力する歌」 50号 1942. 3.1
- ⑥ 「徳王と青旗誌の編集者たちの青旗について談話」 60号 1942. 5.9
- ⑦ 「内モンゴル（当時の蒙疆政権領内のこと）の代表たちが青旗について取材に来たこと」 63号 1942. 5.30
- ⑧ 「青旗の存在価値を理解していたお坊さんたち」 68号 1942. 7.4

上にように、当時の社会の各層の人々は『青旗』誌に関心があっていたことが言える。『青旗』は無償で「蒙疆、日本、北支、朝鮮」に送られ、読者（発行部数と考えれる）は 8000

名であったというみられている⁴。同誌の内容からみても内モンゴルの全社会に広く知られていたのに違いない。

おわりに

1930-40年代の内モンゴルでは、知識人たちがモンゴル民族の振興を目指して、チンギス・ハーン信仰を社会に広げようとしていたことは明らかであった。それが少なくとも、当時の内モンゴルにおける知識人の育成及びその形成にとって重要な要素であった。その中でも重要なのはチンギス・ハーンへの敬いをイデオロギー化したことであった。それにより一般の牧畜民やモンゴル人農民もチンギス・ハーンを崇拝するようになった。それにあたり、当時満洲国でもっとも影響力があったモンゴル語定期刊行物 *Köke tuy* (『青旗』) 誌が果たした役割は大きいと考える。

参考文献 (出版年順)

日本語における参考文献：

蒙疆新聞社 (1941) 『蒙疆年鑑』 蒙疆新聞社

青旗新聞社 (1941-1944) 『青旗』新聞 1-178号 (ただし 欠号あり)

森久男 (1994) 『徳王自伝』、岩波書店

フフバートル (1997) 「植民地の言葉—日本語がモンゴル語に与えた影響」『和光大学人間関係学部紀要』第2号、17-27頁

広川佐保 (1998) 「1940年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」『『日本モンゴル』ル学会紀要』第28号、29-41頁

森久男 (2000) 『徳王の研究』、創土社

フフバートル (2002) 「モンゴルにとっての満洲」『環 満洲とは何だったのか』 藤原書店

内田 孝 (2002) 「内モンゴルの詩人サイチンガーの留学期における著作」『日本モンゴル学会紀要』第32、1-12頁

内田孝 (2008) 「『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動」『東北アジア研究』(島根県立大学・東北アジア地域研究センター) 第14・15合併号、225-243頁。

ナサンバヤル (2008) 「内モンゴルにおける学校教室内のチンギス・ハーン中国の政治・社会環境下のモンゴル史の解釈と利用—タイトルはモンゴル語—特集 文化資源として利用されるチンギス・ハーンモンゴル、日本、中国、ロシアの比較から—」 滋賀県立大学人間文化学部人間文化 24、60-78

⁴ 広川佐保 (2007) 「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」、104-126頁

- Т. Д. Скрынникова (2008) 「ブリヤート・ナショナリズムの形成における
チンギス・ハーン像 ——特集 文化資源として利用されるチンギス・ハーンモンゴル、
日本、中国、ロシアの比較から——」 滋賀県立大学人間文化学部人間文化 24, 53-59
- 島村 一平 (2008) 「文化資源として利用されるチンギス・ハーンモンゴル、日本、中国、
ロシアの比較から ——特集 文化資源として利用されるチンギス・ハーンモンゴル、日
本、中国、ロシアの比較から——」 滋賀県立大学人間文化学部人間文化 24, 7-34
- 鈴木 仁麗 (2012) 『満洲国と内モンゴル—満蒙政策から興安省統治へ—』 明石書店
- 小長谷有紀 (2013) 「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源 : 日本とモンゴルの応答関係か
ら」 国立民族学博物館研究報告 37(4), 425-447
- 森久男 (2009) 『日本軍と内蒙古工作—関東軍はなぜ独走したか—』、講談社

モンゴル語における参考文献：

Altandalai (2004), *yapun-ba öbür mongγul, öbür mongγul-un surγan kömüjil-ün keblel-ün qoriγ-a*.

Ja・ilan (2010), *ulayan bars teki sin-e üge ner-e tomiyan-u orčiyulγ-a neyitelel-ün alqum daray-a kiged arγ-a ončaliγ-un tuqai öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin erdem siljilegen sedgöl*.pp. 99-107.